

体験としての芸術、ガイドとしての芸術家

富田俊明

…創造性というものが、もしも奥深い森で、オープンになっている所と、特別なチャンスと許可がなければ入れないところがあり、また経験と知識豊かなガイドに出会えるかどうかにかかっているならば（さもないと危険を避けられなかったり、貴重なサイトを見逃してしまうように）、そして何より自分自身の足で歩くかどうか、よいアンテナを持っているにかかっているならば、創造性という底知れない森を体験するには、いろんな道がある…（筆者のブログ「Heart Mountain」より、2008年5月）

2007-08年、文化庁海外留学制度のサポートを得て、コミュニティ・アートの調査・研究のためにヨーロッパとオーストラリアを旅してきた。ある時は現地の友人に案内され、またある時は訪れる人もまれな奥地へ一人でかけて、場所々々の暮らしに触れる中から、タイトルに掲げたような洞察が生まれた。

学生の頃からさまざまな旅をしてきたから、ぼくを感じ方や作品はどこか旅の空を映しているはずだ。ぼくは自分自身の足の向くままに歩くのも好きだが、誰かの案内に身を委ねて歩くあの一種独特なワクワク感も格別好きである。『我我の家郷迄来て見ることができますか？』（1999年）は、他者と向き合って評価し判断する心をいったん停止し、他者に寄り添いその肩越しにしか覗くことのできない世界を巡って歩くことの素晴らしさについて語ったものだ。2005年の秋吉台芸術村では、養蜂家の秋山さんを取材させていただき、初夏の採蜜作業を手伝いながら、秋山さんの繊細な観察と気づきに感嘆、山口の自然を特別に体験することができた。

まだ字も読めなかった頃、父の書齋にあった世界ノンフィクション全集の、背表紙に記されたタイトルを読んでくれるようよくねだったものだった。「ちょっとピンぼけ」「ある死体の冒険」「さまよえる湖」「トランス・ヒマラヤ」「愛は死を見つめて」…不思議な言葉と意味の結合。巻頭に数葉ある図版のイメージが語る、ある人生のある瞬間。後年、日系人のコミュニティの調査に出かけたのは、ハワイ出身のある日系詩人の自伝的作品に強く惹かれたからだったが、そこでいかに詩人の描いた世界が現実と異なるかを知った。人の中で体験されあためられた内的・主観的世界に、人の生きる世界の豊かさを感じる。願わくば、ぼくも自分の体験と物語とを伴って、このような声の響きあう世界に一つの声として参入したいものだ。

今回の旅もまた、魅力ある人々との出会いから世界を覗き見る旅だった。アーティスト・コレクティブやオープンソースのスタイルで活動する北欧の芸術家/活動家の友人たち、マケドニアで訪ね歩いた修道院の内部を美しいフレスコで埋め尽くした中世の画僧たち、心理学者ユングが自分自身のために建てた隠遁地ボーリングの塔で黒々とした湖面に映る焚火を眺めて過ごした夜、アーネムランド奥地の岩山に数万年にわたって描かれ語られた壮大な岩絵のサイト、今を生きるアボリジニの遠隔コミュニティのアートセンターやローカルメディアの実践者たち、自身の危機を乗り越えた自助のわざで同胞を支えるアボリジニの老ダンサー…それぞれに眼前の世界と人々に結ばれて着実な歩みを進めていた。芸術と文化の流れの寛さ深さ、そして今は忘れ去られた仕来りを、彼らは垣間見せてくれた。



左：村の少年の案内で滝を観に行く。マケドニアの山間の村ロストゥセにて、

2007年。



上：「道路閉鎖のお知らせ 聖なる儀式が進行中 これより先進入禁止」、ボラダイル山への道の途中、アーネムランドにて、オーストラリア、2008年。

学生時代、創造の源泉はどこかという問いにぶつかったとき、ぼくはそれを夢に求めた。夢は内的・主観的に体験されるものでありながら、どこか自我のコントロールを外れたような自律性を持っているところに惹かれたわけだが、そこからイメージを重視するようになった。このような内的・主観的に体験されるイメージ自体または心的現実をどう共有するかという探究から、ストーリーテリングすなわちライブで語り手と聴き手がともにイメージを生きたものとして体験する場へと移行してきた。もし、芸術体験がもっと内的で主観的なものになるとすれば、それはツーリングに近いものとなるだろう。創造の森を知悉するものとして芸術家にできることがあるとすれば、ガイドとしてイメージの森の危険と秘密を人と分かち合い、サイトを案内することだ。だがこれは芸術家の専有物ではもちろんない。物語を語って語り手のイメージの世界をガイドすることは、誰にでも、子どもにでもできることなのだ。ストーリーテリングを実践してくるなかで、物語とは語り手だけではなく、聴き手の力に大きく依存することも分かってきた。双方の集注が高まるとき、私たちはその場に居ながらにして、圧倒的な世界を体験してることができる。また物語には、語り手と聴き手の関係だけではなく、断片化し関連性を失ったモノ同士をひとつのコスモロジーに関係づけ、心に収めてい

く力がある。

最近、エコ・ツーリズムのフォーラムを聴きに行ってきた。印象的だったのは、専門家だけではなく人々の手に担い手がシフトしてきていること。大人数で観光地を巡るのは外向的で気分を高揚させる体験だが、土地固有の本来の時間の流れの中で、土地の人と旅行者がともに歩調を合わせていくのは静かに内省を促してくれる。その後、コミュニティ・アーツのセミナーに参加する機会もあったが、同じテーマが語られていて、分野は違うが、共通する方向性を感じた。鶴見和子の「内発的發展論」など先進的な理論モデルが、今ようやく人々に意識され実践されるようになったのか。私たちの考え方にも染みついた近代を乗り越え、より根源的なレベルから人間と自然、人間と人間の間を創造し直そうというねりなのか、大きな流れが変わりつつあるのを感じ、勇気づけられた。だが同時に、このような要求の高まりは、いかに私たちの生が断片化し意味を失っているかの証左かもしれない、とも思った。

この一年の旅の成果は、地元コミュニティ・アーツ・センターを立ち上げることに反映していくつもりだ。現在ぼくたちが直面しているグローバル化の流れの中で進行する消費者主義とマーケット化社会がもっとも顕著に表れている場所の一つが、地元・相模原である。市やデヴェロッパが絶えず壊しては建てるので、ぼくたちは記憶と環境の齟齬を来し、ずっと慢性の記憶喪失状態に陥っている。『泉の話』（2001年）は、ぼくの個人的なイメージが地元の人々との交流を通じて物語へと生長し、ぼく自身だけではなく土地の人々をも断絶を超えたつながりへと導いてくれた。地域を自分のものと感じるコミュニティ意識が育ちにくい難しい土地柄だが、どのような芸術と文化が有効にこの問題を解決するかを研究する。アーツ・センターのプロジェクトは、こんな状況では脆い外在的な作品のソリッドな完成ではなく、街の容赦ない変化や人々の移動や流入にも埋もれないように、継続と変化と機転と柔軟性と開放性を特徴とすることになるだろう。

秋吉台についていえば、観光の伝統もあって、土地の魅力への感性と帰属意識が根付いている点が、相模原とは随分違う。自然環境が豊かなので、エコ・ツーリズムが持続的発展には有効かもしれない。創造的なアイデアを揺籃する芸術村の存在もある。ポイントは、主体である土地の人たちがどうしたいかである。海外からの旅行者も増え、秋吉台もまたグローバルな動きにさらされていくだろうが、この点でも芸術村は何らかの役割を果たす可能性がある。

コペンハーゲンでアーティスト・コレクティブ YNKB を主宰する友人フィンに、他者とのワークで大事にしていることは何かと問うと「彼らがプロジェクトを自分自身のものであると感じること」と答えた。芸術家やガイドや旅行者や土地の人だけでなく、全ての人々が求めているのは、一人一人にふさわしい物語ではないか。その中で、人は主人公として、自分だけの小道を歩くのだ。